



女性協議会

春を呼ぶ女性のつどい

九州地連女性協議会

「寄り添う」という言葉の意味を、深く考えさせられた一日でした。

2017年2月25日に福岡市のアクロス福岡で、この時期恒例の「春を呼ぶ女性のつどい」を開催。九州各地から一〇単組・一九名が参加しました。

女性組合員五人のうちの四人が小学生以下の子どもを育てていて、組合活動の継承が厳しくなっているとのこと。女性の管理職とこのか報道デスクにさえ女性がいけないので、生理休暇をとりにくくても相談もできず、過酷な取材現場に送られてしまうなど。日頃「男女平等・女性の社会進出」を高らかに訴える放送局と



「春を呼ぶ女性のつどい」
九州地連女性協議会

記念講演講師の末次夫妻と打ち明けられました。

記念講演の講師は、抗がん剤治療で髪が抜けてしまった患者のために「タオル帽子」をつくる活動を続けている、末次寿さん・由美

は思えない現状が、次々と明らかになりました。

また、KBC映像労組からは、命と健康のために、二時間のインターバル規制を設けることで残業を減らしていくとする要求について、残業代があっても、ようやく生活が成り立っている「低賃金のため、団結

できにくい状況にあるというシレンマも打ち明けられました。

記念講演の講師は、抗がん剤治療で髪が抜けてしまった患者のために「タオル帽子」をつくる活動を続けている、末次寿さん・由美

さん夫妻。自身も、2010年に「余命半年」との宣告を受け、乳がん手術で左胸を全摘した経験を持つ由美さんが、失意から立ち上がり、講演会や地域での活動を通じて、生き生きと輝

き続けるまでの経緯も語る。ことながら、傍らで支え続けた夫・寿さんの悩みや葛藤も、時にユーモアを交えながら赤裸々に語られ、「寄り添うこと」「支えること」の難しさも実感させられました。

「恩は返すものではなく、人から人へ送るもの」。寿さんの言葉は組合活動の原点にも繋がるような気がしています。

(九州地連女性協議会書記長 影平 晶)